



奈良県農業総合研究センター

ニュース

2026

I

vol.170

組織改正のお知らせ

～3組織の統合でより効率的かつ戦略的な研究・技術支援体制へ～

奈良県農業研究開発センター、奈良県病虫害防除所及び奈良県畜産技術センターは令和8年4月1日の組織改正で統合され、「奈良県農業総合研究センター」になりました。

病虫害の発生予察や診断といった「病虫害防除所」の担ってきた業務は、「農業研究開発センター環境科」の環境分野の研究と併せ、「環境・病虫害防除科」が引き継ぎます。

「畜産技術センター」が担ってきた畜産分野の研究のうち、研究開発第一課（宇陀市大字陀）の鶏・豚の飼養等に関する研究は「畜産研究部中小家畜科」が、研究開発第二課（御杖村菅野）の牛の飼養等に関する研究は「畜産研究部大家畜科」が、従来と同じ拠点で担当します。

また、「果樹・薬草研究センター」、「大和茶研究センター」、「大和野菜研究センター」はそれぞれ、「果樹・薬草研究所」、「大和茶研究所」、「大和高原農業研究所」へと改称します。

今回の組織改正により、社会情勢の変化に的確に対応するとともに、より効率的かつ戦略的な研究・技術支援体制を整備し、諸課題の解決に取り組んでまいります。

R7.3.31までの組織			R8.4.1からの組織			所在地
農業研究 開発 センター 	研究企画 推進部	総務課	農業総合 研究 センター	総務 企画部	総務課	桜井市 池之内130-1
		研究企画 推進課		企画課		
	研究 開発部	栽培・流通科		農業 研究部	栽培・流通科	
		環境科			環境・ 病虫害防除科	
		果樹・薬草 研究センター			果樹・薬草 研究所	五條市西吉野町 湯塩1345
		大和茶 研究センター			大和茶 研究所	奈良市矢田原町 乙470-1
		大和野菜 研究センター			大和高原 農業研究所	宇陀市榛原 三宮寺125
病虫害防除所			畜産 研究部	中小家畜科	宇陀市大字陀 下竹103	
畜産技術センター				大家畜科	宇陀郡御杖村 菅野1775-5	

高温による開花期変動が小さい8月咲き小ギク新品種‘春日W3’の育成

～需要期の安定出荷に向けて～

8月咲き小ギクの新品種‘春日W3’を育成しました（図1）。本品種は小ギクの需要期である盆時期に安定して開花する特性を有しています。

1. 背景と目的

本県の小ギクは生産量全国第2位の主要品目です。8月の盆時期には、仏花としての需要が高いため、市場からは安定出荷が求められています。しかし、近年の高温傾向により開花期が前後に変動し、盆時期に計画的に出荷することが困難になっています。そこで、高温の年でも開花時期が変動しにくい8月盆出荷用小ギク品種の育成に取り組みました。

2. 研究成果の概要

露地条件における開花期の年次変動が小さく、かつ無加温ハウスにおける高温条件と露地条件での栽培を比較し、開花期の差が小さいことを基準に選抜しました。

‘春日W3’は奈良県桜井市での4月上～中旬定植の露地栽培で、安定して7月下旬に収穫できます（表1）。4月中旬から7月下旬までの平均気温が露地よりも1.3～1.7℃高い無加温ハウスの高温条件でも、収穫日の変動は既存の品種に比べ小さいです。

花色は白色（RHS カラーチャート NN155D）の一重咲きで、満開時の花径35mm程度、舌状花数18枚程度、頭花数22輪程度、頂点咲き花房型の小ギクです（図1）。コンパクトな草姿であり、調整後の切り花重は‘アクア’や‘シユーペガサス’に比べ小さいですが、茎伸長性に優れているため十分な切り花長が確保できます。

3. 実用化に向けた対応

センター内での調査に加え、2022～2024年には平群町および葛城市における栽培試験を実施するとともに、県内の生産者団体やJA、県等



図1 新品種‘春日W3’の外観と頭花の形状

表1 ‘春日W3’の切り花特性

品種	調査年	対照区 収穫日 (月/日)	高温区 収穫日 (月/日)	対照区と 高温区の差 (日)	切り花長 (cm)	切り花 調整重(g)
春日W3	2024	7/27	7/22	-5.2	109	27
	2023	7/31	7/31	-0.3	104	28
	2022	7/29	7/30	1.5	102	-
アクア	2024	7/12	7/27	15.1	89	34
	2023	7/20	7/16	-3.9	82	36
	2022	7/21	7/20	-1.5	83	-
シユー ペガサス	2024	7/24	7/25	0.9	84	34
	2023	7/28	7/30	2.9	75	33
	2022	7/30	7/25	-4.7	75	-
白波	2024	7/19	7/20	0.7	83	24
	2023	7/24	8/2	8.8	79	32
	2022	7/23	8/1	9.1	88	-

定植日：2024年4月11、12日（2024年開花）、2023年4月11、12日（2023年開花）、2022年4月11日（2022年開花）

2024年、2023年は頂花の舌状花が色を示し、かつ開き始める前、2022年は管状花最外列の開花時にそれぞれ収穫しているため、この間を4日と仮定し、2022年の収穫日データは調査日から4日前の値を示す

切り花調整重は切り花長75cm、下葉脱落15cmに調整した重さ

の関係機関を構成員とする「キク品種選定普及会議」において、関係者の意見をいただくことで、より実用性の高い品種を選抜しました。以上の結果を踏まえ、2025年10月に品種登録を出願しました（出願番号：第38238号）。これまでに当センターでは、8月盆出荷用小ギクとして赤色2品種、黄色1品種を育成しており、白色の‘春日W3’を加えた品種群を利用することで、需要期の出荷量が安定し、奈良県産小ギクの競争力が向上することを期待しています。

（栽培・流通科 辻本直樹）

遅効性薬剤に対応したヒラズハナアザミウマの薬剤感受性検定法の開発

～ヒラズハナアザミウマ防除の精度向上に向けて～

アザミウマ類の殺虫剤感受性検定法は、これまで処理2～3日後の速効的な効果を評価しており、遅効的に効果が発現する殺虫剤を評価することができませんでした。そこで、ヒラズハナアザミウマを対象として処理7日後までの評価が可能な感受性検定法を開発しました。

1. 背景と目的

ヒラズハナアザミウマは果菜類、花き類の重要害虫です(図1)。奈良県では主に、イチゴの果実褐変やトマトの白ぶくれ症状、バラの花弁褐変などの被害が問題になります。防除には主に殺虫剤が用いられますが、薬剤によっては効果の低下がみられるため、定期的に感受性を調べ、効果の高い薬剤を選ぶことが重要です。

アザミウマ類の感受性検定には、薬剤処理したインゲン葉片を用いる方法が広く使われています。しかし、この方法では葉片の劣化が早く、処理2～3日後までしか効果判定できません。そのため、処理直後の死虫率は低くても、その後遅れて効果が現れる薬剤については、効果を十分に評価できない可能性があります。実際に、遅効的に効果が発現する薬剤では、従来法では効果が低いと判断されても、実際の防除場面では有効であるとの声もありました。

そこで、ヒラズハナアザミウマを対象に、処理7日後まで殺虫効果を評価できる感受性検定法を開発しました。



図1 ヒラズハナアザミウマ

2. 研究成果の概要

県内の促成イチゴ生産ほ場から採集したヒラズハナアザミウマ成虫を用いて試験を行いました。薬剤処理したインゲン初生葉を、水で湿らせた脱脂綿の上に置いた検定容器に供試虫を入れ、処理2日後と7日後に生死を判定しました。この方法により、従来法では難しかった処理7日後まで葉の鮮度を保ちながら検定できました。

また結果を見ると、アフーム乳剤とベネビアODでは、処理2日後には効果が低かった一方、処理7日後には効果が向上しました(図2)。両剤はヒラズハナアザミウマに対して遅効的に効果が発現する薬剤であり、本法はその評価に有効であると考えられました。

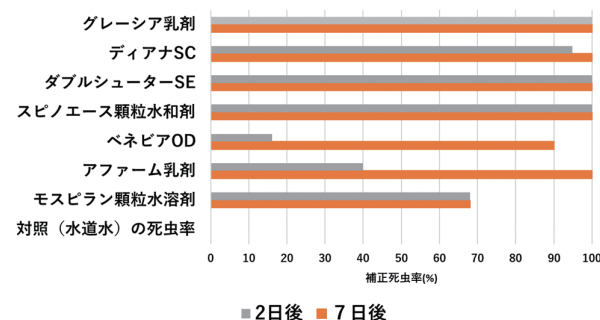


図2 開発した検定法による感受性検定結果

3. 実用化に向けた対応

今後は、本法を県内産地で採集したヒラズハナアザミウマ個体群の感受性検定に活用し、遅効性薬剤を含めた防除薬剤の適切な選定に役立てます。

(環境・病虫害防除科 藤森颯太)

カキ加温ハウスにおける熱帯果樹の栽培適性検討

～温暖化を逆手に、新規品目による収益補完の可能性を探る～

カキ加温ハウスにおいて収益補完を目的とした熱帯果樹栽培を試行したところ、アボカドとライチは冬期の無加温期間に目立った低温障害がみられず、栽培できる可能性が示唆されました。

1. 背景と目的

奈良県のカキ加温ハウス栽培は全国1位の面積を誇っています。しかし、近年は資材高騰に加え、果実の着色遅れなど温暖化の影響が経営上の課題となっています。一方で、温暖化は熱帯果樹類などの新規品目導入の契機となる可能性も指摘されています。そこで、ハウス内の空きスペースで熱帯果樹を小規模にポット栽培することで、収益を補完する方法を検討することになりました（図1）。

カキの加温ハウス栽培では、低温で休眠を打破するための無加温期間があります。この時期に熱帯果樹に低温障害が生じる可能性が最も懸念されたので、冬期に数種類の熱帯果樹を供試したポット栽培試験を実施しました。

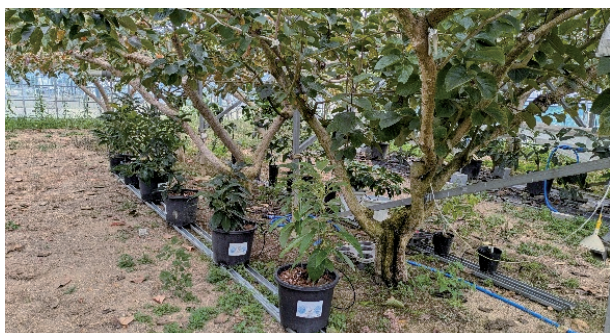


図1 カキ加温ハウス内の熱帯果樹ポット栽培

2. 研究成果の概要

供試品目はアボカド、ライチ、コーヒーおよびパパイヤとしました。これらを選んだ理由は、知名度が高く需要が見込める一方で、国内でまだ大きな産地がないため、ネット直売などで少量高単価販売が期待できると考えたためです。

2024年11月1日に、1年生ポット樹をカキ加温ハウスに搬入しました。翌年1月15日に加温を開始するまでのハウス内の最低気温は12月20日の-2.3℃となりました（図2）。

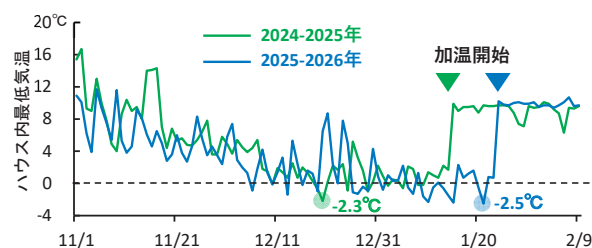


図2 試験期間中のハウス内最低気温の推移

この間に、コーヒーとパパイヤでは葉が先の方から徐々に枯れ、最終的には株全体が枯死しました（図3）。一方、アボカドとライチでは枯死や目立った障害はみられず、春以降は問題無く新梢が発生しました（図4）。また、アボカドとライチについては2025年にも同様の試験を実施し、ハウス内最低気温は-2.5℃となりましたが（図2）、このときも障害はみられず、栽培適性が示唆されました。



図3 低温による
枯死



図4 春以降の萌芽の様子

3. 実用化に向けた対応

アボカドとライチは最大の懸念事項であった耐寒性の問題をクリアできる可能性が高いと考えられました。しかし、生産現場での栽培を進めるには、安定着果を実現する栽培管理法、カキへの農薬散布時のドリフト防止策など、まだ多くの課題が残されています。今後も栽培試験を進め、実用的な栽培技術の確立を目指していきたいと考えています。

（果樹・薬草研究所 米田健一）

大和高原地域におけるサトイモ有機栽培の検討

～有機 JAS 適合農薬の使用で慣行並みの防除が可能～

害虫の早期発見と早期防除を徹底することで、有機 JAS 適合農薬のみを使用して慣行栽培と同等の収量を得ることができました。

1. 背景と目的

奈良県では有機農業への関心が高まっており、2022 年に宇陀市、2024 年に天理市、2025 年に山添村がオーガニックビレッジ宣言を行いました。大和高原地域では、これまでハウスの葉物野菜を中心に有機栽培が行われてきましたが、露地ほ場での有機栽培はほとんど実績がなく、品目の選定が進んでいませんでした。そこで、本研究では大和高原地域の露地ほ場で有機栽培可能な品目の候補として、サトイモを選定し、有機 JAS 適合農薬のみを用いた栽培に取り組みました。

2. 研究成果の概要

大和野菜研究センター（現：大和高原農業研究所）の露地ほ場にて 2024 年と 2025 年の 2 回試験を実施しました。試験は有機 JAS 適合農薬のみを用いて防除を行う「有機区」と化学農薬も使用する「慣行区」を設けました。サトイモではハスモンヨトウ等のチョウ目害虫による被害が問題となります。有機 JAS 適合農薬は害虫の幼虫が成長すると効果が低下することがあるため、こまめな薬剤散布を行いました。

その結果、薬剤散布回数は両年とも「慣行区」の 4 回に対して「有機区」は 6 回とやや多くなりました（表 1）。

ハスモンヨトウによる葉の食害（被害度）は、2024 年は「有機区」が「慣行区」よりやや高く推移しましたが（表 2）、2025 年は「慣行区」と同程度でした（表 3）。

「有機区」の収量は、両年とも「慣行区」と同等でした（表 4）。

表 1 2024 年と 2025 年の試験で使用した薬剤

使用年月日	有機区	慣行区
2024/6/10	BT 水和剤(クルスターキ系統)	ピリダリル水和剤
8/22	BT 水和剤(アイザワイ系統)	フルキサメタミド乳剤
8/27	BT 水和剤(クルスターキ系統)	ピリダリル水和剤
9/13	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	—
9/18	BT 水和剤(アイザワイ系統)	—
10/11	BT 水和剤(アイザワイ系統)	フルキサメタミド乳剤
2025/6/5	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	ピリダリル水和剤
6/23	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	—
6/30	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	ピリダリル水和剤
7/18	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	—
7/31	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	フルキサメタミド乳剤
8/22	BT 水和剤(クルスターキ系統+アイザワイ系統)	—
8/27	—	フルキサメタミド乳剤

表 2 2024 年のハスモンヨトウ被害度

試験区	調査日					
	8/22	8/26	9/2	9/12	9/17	9/25
有機区	10.4 [†]	18.1	22.9	24.3	25.7	25.0
慣行区	2.8	8.3	7.6	6.3	7.6	8.3

[†]被害度は NA：食害なし、NB：食害が葉の 10% 以下、NC：食害が葉の 11～30%、ND：食害が葉の 31% 以上とし、

被害度 = (ONA+1NB+2NC+3ND) / 3N × 100 で算出。N = NA+NB+NC+ND

[‡] 平均値 (n=3)

表 3 2025 年のハスモンヨトウ被害度

試験区	調査日									
	5/22	6/5	6/18	7/3	7/17	7/31	8/13	8/29	9/11	9/26
有機区	0.0 [†]	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0	0.0	17.8	11.1
慣行区	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.9	11.1

[†]被害度は NA：食害なし、NB：食害が葉の 10% 以下、NC：食害が葉の 11～30%、ND：食害が葉の 31% 以上とし、

被害度 = (ONA+1NB+2NC+3ND) / 3N × 100 で算出。N = NA+NB+NC+ND

[‡] 平均値 (n=3)

表 4 栽培方法の違いが収量に及ぼす影響

年	試験区	出荷可		出荷不可	
		芋個数 (個/株)	芋重量 (g/株)	芋個数 (個/株)	芋重量 (g/株)
2024 年	有機区	18	1302	18	662
	慣行区	17	1304	18	790
	有意性	n. s. [‡]	n. s.	n. s.	*
2025 年	有機区	20	1518	42	1155
	慣行区	21	1565	32	1099
	有意性	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.

[†]t 検定により、* は 5% 水準で有意差が認められることを示す。n. s. は有意差なし (n=3)

3. 実用化に向けた対応

大和高原地域でのサトイモの有機栽培についてマニュアルにまとめるとともに、ヤマノイモやニンジン等のその他の品目についても大和高原地域での有機栽培の適性を調査します。

(大和高原農業研究所 厚見治之)

早期からの暗期設定が大和肉鶏の生産性に及ぼす影響

～大和肉鶏では早期日齢からの暗期設定は生産性向上につながらない～

常時点灯で管理が推奨される大和肉鶏飼育において、早期から暗期を設定した場合、生産性が低下する傾向が見られました。

1. 背景と目的

18週飼育する大和肉鶏は照度0.5ルクス24時間点灯が推奨されていますが、飼育期間が短いブロイラーでは消灯する暗期を設定することで生産性向上が報告されています。

7月発生の大和肉鶏の8週齢以降で、様々な暗期と照度の組合せを調査したところ、1時間の暗期と2ルクスの照度の組合せで、従来と同等の生産性が示唆されましたが、生産性向上までは見られませんでした。この原因として8週齢以降の暗期設定では開始時期が遅い可能性が考えられたため、今回5日齢という早期から暗期設定した場合の影響を調査しました。

2. 研究成果の概要

10月17日発生の大和肉鶏の5日齢から18週齢まで、1時間の暗期を設けた23時間点灯を実施しました。対照区はガイドライン通りの0.5ルクス24時間点灯としました。

体重については、18週齢で雌雄とも試験区が小さい傾向となりました（図1）。一方、飼料要求率（1kg体重を増加させるために必要な飼料量）を週齢別に比較すると、17～18週齢で試験区が対照区に比べ増加しました（図2）。

この要因として、本来増体へ利用されるエネルギーが、繁殖行動に消費された可能性があります。本試験は外部の光がわずかでも入る環境で実施したため、鶏の光感受性等の季節差による要因により、性成熟が早まり繁殖行動が活発化したと考えられます。

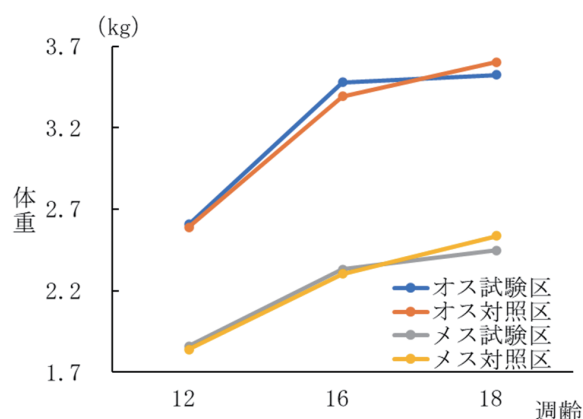


図1 体重推移

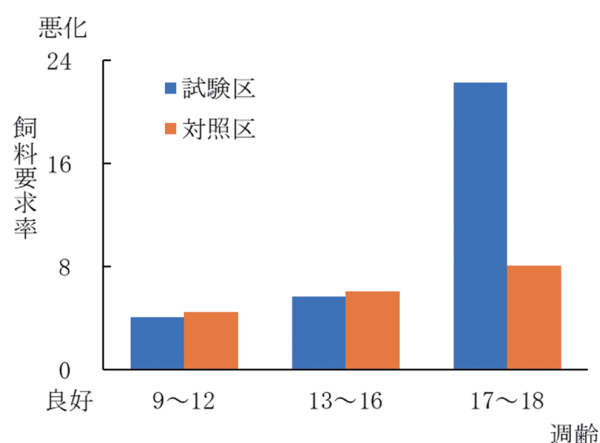


図2 飼料要求率

3. 実用化に向けた対応

繁殖行動はエネルギーの消費量を増やすだけでなく、雄が上に乗ることで雌の脱羽等を引き起こし、肉鶏にとって商品価値の低下を招きます。本試験から、早期の暗期設定は鶏の性成熟を早め、生産性の悪化につながる可能性が示されました。

（畜産研究部中小家畜科 倉田佳洋）